

契丹語二項対立子音の弁別特徴について

吉池孝一

1. はじめに

契丹語の破裂音および破擦音の二項対立子音は、ふつう p と b、t と d、k と g、ʃ と dʒ、とされる。なお、固有語に ts や dz はない。本稿は、二項対立子音の弁別特徴は気音の有無であり、p^h と p、t^h と t、k^h と k、ʃ^h と ʃ であったとする。根拠は、借用漢語音の ts- ts^h- s- を契丹小字で表記する際に、**𐰺** で s- と ts^h- を表記し、新たに **𐰺** をつくって ts- を表記したことにある。有気音 ts^h- と無気音 ts- を分けて表記したのであるが、このような文字表記の偏りは、気音の有無により語音を区別するという契丹語話者の習慣の反映と解釈する。以上は文字表記の偏りというわずかな根拠によるものであるが一案として提示する。

2. 契丹小字の使用期間

契丹小字について、『遼史』卷六十四「皇子表」に「回鶻使至，無能通其語者。太后謂太祖曰，迭刺聰敏可使。遣迓之。相從二旬，能習其言與書，因制契丹小字，數少而該貫。」とある。その作成時期について、白鳥庫吉(1898)「契丹女真西夏文字考」は、ウイグルの使者の来貢年より推し、天贊三年(924)か天贊四年(925)とする。この契丹文字は金朝に入っても継続して使用され、『金史』卷九「章宗」に「直至章宗明昌二年(1191)，金朝国史院才罷專写契丹字者。」とあるので1191年まで続いたことがわかる。924年又は925年から1191年まで、遼朝と金朝にわたって、ほぼ260年あまり使用されたことになる。

3. 漢語音 ts- ts^h- s- の表記法

契丹小字で書かれた契丹語の文章の中に、役職名や人名・地名など漢語からの借用語が少なからず含まれている。そのなかの漢語の ts- ts^h- s- の表記に興味深い現象がみられる。なお、契丹語には s- という子音はあったが ts- や ts^h- という子音はなかったようである¹。そのような中で、漢語の ts- ts^h- s- を、契丹文字でどのように表記したかという点、契丹語の s- を表記する契丹小字 **𐰺** を用いて、漢語の ts- ts^h- s- の全てを表記した。それとともに、漢語音の ts- を表記する専用字として **𐰺** を作って併用した。これが遼朝の状況である。その後、金

¹ 『遼史』をはじめとして、宋や元で編纂された史籍には、漢字で音写された契丹語がある。孫伯君・聶鴻音(2008)は契丹語の語彙を138例あげる。そのうち s- の漢字を含む語彙は21例、ts^h- を含む語彙は2例となっている。ts^h- の2例は“操刺”(勇猛な)の操 ts^h- と“羅草”(卷狩の一種)の草 ts^h- である。s- の漢字は多用されるが、ts- や ts^h- はほとんど使用されない。このことより、同書は、契丹語に s- はあったが ts- ts^h- はなく、音訳漢字の操 ts^h- と草 ts^h- は s- の表記を意図したものとする。早くは聶鴻音(1988)において、遼史「国語解」で漢字表記された契丹の固有語には摩擦音 s- を持つ漢字のみが用いられることより契丹語には ts- や ts^h- はないとした。

朝になってから ts^h -を表記する専用字として **秀** を作って併用した。新たに作った **傘** ts -と **秀** ts^h -の用い方は、遼朝と金朝では異なる。劉鳳翥編著『契丹文字研究類編 第一冊～第四冊』（中華書局、2014年）には、年号のわかる契丹小字の碑文の拓本資料が31種収められており、そのうち金朝のものは4種ある。それによって **傘**、**傘**、**秀** の使用の状況を示すと次のようになる²。

遼朝

ts -	傘 もしくは 傘
ts^h -	傘
s -	傘

金朝

ts -	傘 もしくは 傘
ts^h -	傘 もしくは 秀
s -	傘

4. 遼朝における文字表記の偏り

金朝の用法は漢語音をできるだけ正確に表記しようという努力の現れとして理解できる。それに対して、遼朝の用法には偏りがある。**傘** で s -と ts^h -を表記し、新たに**傘** をつくって ts -を表記した。**傘** で漢語の摩擦音 s -を表記し**傘** で破擦音の ts -と ts^h -を表記してもよかつたはずであるが（後述するウイグル文献は s -と ts - ts^h -に二分する）、そのようにはしなかった。このような表記の偏りが生じた原因を説明しなければならないが、管見にして、この点について論じたものを知らない。以下に一つの見方を提示する。

漢語音の ts - ts^h - s -を聞いて、有気音 ts^h -の方を s -の仲間として聞き取り、 ts^h -と s -の両者を**傘** で表記したわけであるが、それは摩擦音 s が持続して息を出すため有気音とともにまとめたのであろう³。それに対して、 ts -を専用の文字**傘** によって表記したのは、無気音の ts -が、有気音の ts^h -やそれに連なる s -とは異なって聞こえたためであろう。文字の表記法には、それを使用する人の音韻の習慣があらわれるわけであるが、漢語音 ts - ts^h - s -の表記法をみる限り、気音の有無によって二分されている。このような表記法は、契丹語話者の発音上の習

² 遼朝における **傘** と **傘** の使用の状況は、清格爾泰(1985)および聶鴻音(1988)で言及された。清格爾泰(1985)は **傘** を s -、**傘** を ts -と再構し、 ts -音の存在を認めるわけであるが、おそらく借用語音として認めるのであろう。聶鴻音(1988)は **傘** と **傘** をともに s -とし、**傘** を ts -と再構するのは誤りであるとした。両者は見解を異にする。**秀** が漢語専用字として新たに作られことは沈彙(1980)が指摘した。吉池孝一(2003)および吉池孝一(2004)は、漢語音 ts - ts^h - s -の表記は時代が降るとともに徐々に精密になっていくことを資料によって跡付けた。

³ Svantesson, J.O.[et al.](2008) *The phonology of Mongolian* によると次のとおり。ハルハ方言の $t^h at^h$ (引く) をチャハル方言で $t at^h$ とする。これはチャハル方言において有気音 t^h の影響（異化作用）で語頭の t^h が t となったもの。同様にハルハ方言の $t^h os$ (脂肪) をチャハル方言で $t os$ とする。これはチャハル方言において摩擦音 s の影響で語頭の t^h が t となったもの。このような異化を引き起こす点において、蒙古語の s は、 t^h などの有気の破裂音とグループをなす。

慣を反映したものであろう。その場合、気音の有無によって二分する発音上の習慣がどこからきたか、ということが問題となる。

5. 文字表記の偏りの解釈

孫伯君・聶鴻音(2008)は、契丹語の子音として、*p* と *b*、*t* と *d*、*k* と *g*、*ʃ* と *ɟ* の二系列をあげ⁴、前者を無声・有気、後者を有聲・無気とする。Shimunek(2007)は無声と有聲とする。問題は、この二系列を区別した主な音の違いはなんであったか、それを契丹語話者はどのように意識していたかということである。本稿は、契丹語話者が、*p* と *b*、*t* と *d*、*k* と *g*、*ʃ* と *ɟ* の二系列を、有気音と無気音によって区別する習慣を持っており、その習慣を漢語音 *ts*-*ts^h*-*s* の表記に持ち込んだため、有気音の *ts^h* およびそれに連なる *s* を *𐰺* で表記し、無気音の *ts* を *𐰽* で表記したと解釈する。

6. ウイグル文字による漢語の *ts*-*ts^h*-*s* の表記

先に挙げた『遼史』卷六十四「皇子表」に「回鶻使至，無能通其語者。太后謂太祖曰，迭刺聰敏可使。遣迓之。相從二旬，能習其言與書，因制契丹小字，數少而該貫。」とあり、ウイグルの使者より言語と文字表記を習い、それによって契丹小字を作ったとある。そうであるならば、ウイグル文字・ウイグル語で漢語音をどのように表記したかを確認する必要がある。この点について二つの論文をみる。庄垣内正弘(1986)は、ウイグル語に訳された『大慈恩寺三蔵法師伝』（五代末から宋初の間に訳されたと推定）の漢語音の研究である。ウイグル語の破裂音には *p* と *b*、*t* と *d*、*k* と *g* があり無声と有聲の対立であるという。破擦音は無声の *č* のみあり、*dz* や *ts* や *ts^h* はない。摩擦音には *s* と *z* があるとする。そこで、漢語音 *ts*-*ts^h*-*s* をどのように表記したか。借用語用の表記としてあるウイグル文字の *t* プラス *s* (*ts*) を用いて漢語音 *ts*-*ts^h* を表記し、ウイグル文字 *s* で漢語音 *s* を表記したとする。例外も多いが *ts*-*ts^h* と *s* に二分する傾向をみてとれる。庄垣内正弘(1995)は、ロシア科学アカデミー・サンクトペテルブルグ支所所蔵のウイグル文字音写漢文断片（元代）の研究である。漢語音 *ts*-*ts^h*-*s* はウイグル文字 *s* で表記されており、「おそらく *ts* というウイグル語に存在しない破擦音が、摩擦音として反映されたものと考えられる。」(99 頁)、「ウイグル文献中の借用漢語では、この *s* 表記はとくに後期文献にみられるので、やはり新しい時代の音表示と推定できる。」(108 頁)とする。漢語音 *ts*-*ts^h* をウイグル文字 *ts* で表記するのは借用語の表記で、漢語音 *ts*-*ts^h*-*s* をウイグル文字 *s* で表記するのはウイグル語による訛りということであろう。それはともかくとして、『大慈恩寺三蔵法師伝』は漢語音を *ts*-*ts^h* と *s* に二分し、遼朝の契丹小字は漢語音を *ts*- と *ts^h*-*s* に二分するところが異なっており、少なくとも漢語音 *ts*-*ts^h*-*s* の表記法について、契丹小字はウイグル文字・ウイグル語の影響を受けていない、とみてよい。このような表記法の相違がどこから来たか。おそらく、前者のウイグル語は二項対立子音において有聲と無聲の区別が重要であったため気音の有無

⁴ 孫伯君・聶鴻音著(2008)は破擦音を *č* *j* とするが、*ʃ* *ɟ* に改めた。

によらず破擦音 ts- ts^h-と摩擦音 s-という調音の方法により二分し、後者の契丹語は二項対立子音において有気と無気の区別が重要であったため有気音 ts^h- s-と無気音 ts-により二分したということであろう。

7. おわりに —契丹語二項対立子音の音韻と音声—

以上により、契丹語の二項対立子音を/p^h/と/p/、/t^h/と/t/、/k^h/と/k/、/tʃ^h/と/tʃ/とする。もっとも、実際の音声は、[p^h]と[p~b]、[t^h]と[t~d]、[k^h]と[k~g]、[tʃ^h]と[tʃ~dʒ]であったかもしれない。そのばあい、有声という音特徴は余剰なものということになる。

参考文献（発行年順）

- 白鳥庫吉(1898)「契丹女真西夏文字考」『史学雑誌』第九編第十一・十二号。『白鳥庫吉全集 第五卷 塞外民族史研究 下』（岩波書店、1970年）所収：45—68。
- 沈彙(1980)「論契丹小字的創製與解讀—兼論達斡爾族的族源」『中央民族学院学報』1980-4：50—57。
- 清格爾泰・劉鳳翥・陳乃雄・于宝麟・邢復礼(1985)『契丹小字研究』北京：中国社会科学出版社。
- 聶鴻音(1988)「論契丹語中漢語借用詞的音系基礎」『民族語文』1988-2：41—49。
- 庄垣内正弘(1986)「ウイグル文献に導入された漢語に関する研究」『内陸アジア言語の研究』II：17—156、神戸市外国語大学外国学研究所。
- 庄垣内正弘(1995)「ウイグル文字音写された漢語仏典断片について —ウイグル漢字音の研究—」『言語学研究』14：65—153+図版9。
- 吉池孝一(2003)「漢語の精母系子音を表わす契丹小字について」『KOTONOHA』13：18—21。
- 吉池孝一(2004)「止摂開口精母系の漢語音を表わす契丹小字について」『KOTONOHA』14：11—14。
- Shimunek, A. E. (2007) *Towards a Reconstruction of the Kitan language, with Notes on Northern Late Middle Chinese Phonology*, M.A. Thesis, Bloomington : Indiana University.
- Svantesson, J.O. [et al.] (2008) *The phonology of Mongolian*. Oxford University Press.
- 孫伯君・聶鴻音(2008)『契丹語研究』北京：中国社会科学出版社。
- 劉鳳翥編著(2014)『契丹文字研究類編 第一冊～第四冊』北京：中華書局。